
恋愛しよう その3

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛しよう その3

【Nコード】

N8185K

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

恋愛に縁のない寂しい人生を送っている主人公、堤たけし。勤めていた工場も潰れてしまって、現在フリーター。さまざまな出会いはあるものの、なかなかうまくはいかない。果たして彼は最終的に幸せを手にすることが出来るのか…。

作：青木弘樹

家に帰ったたけしは、仮眠を取った。

夜の待ち合わせは午後8時。まなぶは来ないが、女の子（名前は松浦けいこ）にはちゃんと連絡してあるから大丈夫とのことだった。待ち合わせ場所は、とある居酒屋。お酒を飲むのでタクシーで行く予定だ。

午後六時ごろ。たけしは起きた。

またもや身だしなみを整え、来たる本日のメインイベントに備えるたけし。

「どんな子かなあ…」

たけしはウキウキしていた。

その頃。ここはあるパチンコ店の外。そこにはまなぶとけいこがいた。

まなぶはちょうど仕事の休憩中だった。けいこは仕事は休みだった。

「けいこ、時間に遅れるなよ。お前は遅刻魔だからな」

「分かってるよ。8時でしょ？」

「ああ」

「ねえ、まなぶ、さとみとはいっ別れるの？」

「はあ？俺がいつさとみと別れるなんて言ったよ？」

さとみとはまなぶの彼女だ。

「だってこのあいだも喧嘩したんでしょ？」

「喧嘩はしたけど、別に別れないよ」

「もう…今日だってまなぶの頼みだから聞いてあげたのに…」

「まったく、なに勝手なことやってんだ」

「私、まなぶが別れるの待ってるんだからね」

「あのなあ…」

「分かったわよ」

「お前なあ、たけしさんの前でそっけない態度とか取るなよ」

「分かってるわよ」

「じゃあ、そろそろ仕事に戻るから」

「え〜？さみしいよ〜」

「うるさい。じゃあな、頑張つてな」

まなぶは仕事に戻って行った。

「もう…」

なんと、けいこはまなぶに好意を持っているようだった。しかしたけしはそんなことは知る由もない。トラブルにならなければいいが…。

そんなこんなで夜8時。

たけしはタクシーで待ち合わせ場所に向かい、やがて居酒屋の前に着いた。

「さて、けいこさん来てるかな？」

あたりを見渡すが、それらしい人はいない。

「まだ来ていないのかな？」

すると一台の車がやってきた。ワゴンタイプの軽自動車だ。

「じゃあね、けいこ」

「うん、ありがとう」

助手席から女性が出てきた。けいこと呼ばれていた。彼女がそうだろう。

送ってくれた友人を見送るけいこ。

「あ、あの…」

たけしは近寄り、声をかけてみた。

「はい？」

「もしかして、松浦けいこさんですか？」

「はい…、あ、堤たけしさんですか？」

「そうです。はじめまして」

「はじめまして。どうも」

けいこは笑顔だった。社交辞令だとは思うが、とにかく笑顔だった。

「いや、すみません。わざわざお越しいただいて」

「いえいえ、とんでもないです」

たけしも笑顔だった。こちらは心からの笑顔。けいこは表情豊かで、非常にかわいらしい感じの子だった。

「じゃあ、とりあえず入ろうか」

「そうですね」

二人は店に入っていった。

「つしやいませ！ようこそ！」

お店はそこそこにぎわっていた。店員に案内され、二人は席に着いた。

ビールと、いくつか食べ物を注文し、二人は一息ついた。

「えと、じゃあとりあえず、はじめまして、堤たけしです」

「あ、どうも…松浦けいこです」

二人は自己紹介した。当然だが初対面なので、若干緊張している。確かまなぶ君は、けいこさんのお兄さんと同級生なんだよね？」

「はい、そうです」

「じゃあ、友達暦はけっこう長いんだ」

「そうですね。たけしさんはまなぶ君とは職場がいつしよだったんですよね？」

「え、うん。そうなんだ」

たけしは万引きでまなぶに捕まったとは言っていないかった。そんなことは言えないので、まなぶと口裏を合わせ、同じ工場で働いていたことにしていた。

「でも大変ですよ。会社つぶれちゃって」

「そうだね。でもまあ、なんとかなるさ」
その時、

「はい、お待たせしました」

ビールがやってきた。

「お、きたきた」

二人はとりあえず乾杯した。そして一口飲んだ。

「いやあ、美味しい。やっぱ生ビールはいいね」

「そうですね」

間もなくして、注文していた食べ物もいくつかやってきた。二人はそれらを食べながら、話をしていた。

「それにしてもさあ、まなぶ君って男前じゃない？」

「そうですね、確かに」

「芸能人になっても、おかしくないよね」

「そうですね。聞いた話なんですけど、むかし一度街中でスカウトされたらしいですよ」

「ほう」

「けど、芸能界にはぜんぜん興味ないみたいです」

「そうなんだ」

「ちよつと、もったいないですよね」

「だよな」

ビールを飲みながら、話は続いた。

「彼はやつぱりもてるでしょ？」

「そう思います。性格もいいですからね。ほら、ああ見えて全然チヤラチヤラしてないし、彼女を大事にするし」

「彼女はどんな人なの？」

「えっと、まなぶ君より二つ下で、かわいい子ですよ」

「へえ」

「よく喧嘩はしてるみたいですけど、ほら喧嘩するほど仲がいいって言うじゃないですか」

「ははは、そうだね」

「いいですよ〜、あんな人が彼氏で」

「…」

「あ、ごめんなさい、私…」

「いやいや、そりゃあそうだよ。男前で性格もいいならね」

「…」

「まなぶ君は、結婚しないのかな？」

「なんか、結婚する予定もあつたみたいなんですけど、ほら、会社が潰れちゃったから、ちよつと無理になっちゃったみたいで」

「そうなんだ。気の毒に」

「かわいそうですよね…」

たけしはなんとなく気づいた。けいこはまなぶに気があるな、と。二時間ほど話をした後、たけしは帰る事にした。

「さて、じゃあ明日は仕事だから、そろそろ帰ろうか」

「あ、はい」

たけしは会計を済ませ、二人は店を出た。

「ごちそうさまでした」

「いえいえ」

笑顔のたけし。しかしこれは作り笑顔だった。

「じゃあこれ、俺の連絡先。よかつたら連絡して」

たけしは事前に用意しておいたメモをけいこに渡した。しかし期待はしていなかった。

「あ、はい。わかりました」

「じゃあね」

「はい。ありがとうございます」

たけしは逃げるようにその場を去り、タクシーで帰っていった。けいこは友人に迎えに来てもらい、帰っていった。

「はあ…また無駄なお金使っちゃたな…」

久しぶりに若い女の子との食事、しかもふたりも知り合えたのに、何もいいことがなかったたけし。

「俺は…一生ひとりか…？」

しばらくボーっとしていたが、やがて眠りについた。
人生は、いいことがあっても、嫌なことがあっても、時間は待つ
てくれない。さあ、明日からまた仕事だ。なんとか頑張ろう…。

三日ほど過ぎたある日、たけしは思うことがあり、まなぶに連絡
をした。

そして夜、少しまなぶと会って話すことになった。
とある牛丼屋。

「たけしさん、どうしたんです？急に？」

「やあ、まなぶ君。いや、ちょっとね…」

実はたけしは今日職場で嫌なことがあり、少しイライラしていた。

「この間は女の子を紹介してくれてありがとう」

「いえ、とんでもないっす」

「なかなかかわいい子だったよ」

「そうですね、ちょっとドジですけど」

「…」

「それで、どうでしたか？うまくいきそうですか？」

「…、あの子から…何も聞いてないの？」

「はい。最近ちょっとバタバタしてて…」

「そう。まあ、あれだよ…たぶん向こうは…俺に興味はないだろう
な」

「そ、そうですね…」

たけしは元気がなかった。正確には少し怒っていた。

「ところでさ、彼女とはうまくいってる？」

「え？そうですね。ポチポチですね」

「聞いたんだけど、よく喧嘩するんだってね」

「え？けいこが言ってたんですか？」

「うん」

「まったくあいつ…おしゃべりだな。まあ、たまにですよ」

「ぶっん…」

たけしはそつない話をしてしたが、本当は聞きたいことがあった。
「ゴホン！」

たけしは咳払いをし、本題を切り出した。

「あのさ…けいこさんと話してて、なんとなく思ってたんだけど…」
「なんですか？」

「あの子…君のことが好きだよな？」

「…！？」

「まあ、はつきり聞いたわけじゃないけどさ。心当たりあるだろ？」
「…」

まなぶは気まずかったが、黙ってるわけにもいかなかった。

「たぶん…そんな感じですね」

「ふうん…」

たけしはテーブルを見ていた。

「まなぶ君…ひよつとして…俺をからかったの？」

たけしはズバリ聞いた。

「そ、そんな！とんでもないです！」

「だってさ…あの子が君を好きなら、紹介しても意味ないでしょ？」

「いや、でも…俺、彼女いるし、あいつはただの友達で…」

「…」

「たまたま自分の周りで彼氏がない子があいつくらいで…」

「ま、いいけどね。別に…」

「…」

しばらく沈黙が続いた。

「あゝあ、俺も君みたいに男前に生まれたかったな」

「？」

「そしたら女をとつかえひつかえして、楽しい人生だろうなあ」

たけしはあからさまにいやみを言った。

「…」

しばらく黙っていたが、真顔でまなぶが話し始めた。

「たけしさん、俺は女をとつかえひつかえしたことなんてないです」

よ

「…」

「たけしさん、今まで何人の女性と付き合いましたか？」

「え？俺は…五人くらいかな」

「そうですか。俺は二人ですよ」

「!？」

「俺…いつもそんなことばかり言われるんですよ。遊んでるとか、二股かけてるとか。確かに女友達は多いですよ。けど俺は女をとつかえひつかえなんかしたことないです。さとみとはもう6年つきあって、本当は結婚する予定だったけど…会社が潰れて…」

「…」

「確かに、あいつ（けいこ）を紹介したのは俺の落ち度かもしれない。けど、女をとつかえひつかえしてるなんて…決めつけないで下さい」

まなぶは真剣だった。

「…」

たけしは少し気圧された。しかしまなぶの意見は正しかった。

「…ごめん」

たけしは頭を下げた。

「俺が悪かった、まなぶ君。会って間もないのに女の子を紹介してくれた人に、ひどいことを…」

「…」

「君はけいこさんの言うとおりの人だった。そうさ、だからもてるのさ。そして、こんな性格だから俺はもてないんだよね」

「たけしさん…」

「本当にごめん。心から謝るよ」

「いえ、分かっていただけなら…いいんです」

その後、牛丼を食べた二人は、外へ出た。

「まなぶ君、今日は悪かったね、急に呼び出したりして」

「いえ、俺も話聞きたかったし、ちょうどよかったですよ」

「さてと…」

たけしは深呼吸をした。

「俺も頑張るよ、まなぶ君」

「？」

「ほら、前に話してたじゃん？もてなかった友人が、頑張ってたかわいい嫁さんゲットした話」

「ええ…」

「俺も頑張るよ。恋愛…したいもんな」

「たけしさん…」

「まあけいこさんにも一応俺の連絡先は渡したけど、たぶん連絡は来ないだろうから、よろしく言っといてね」

「え？は、はい」

「じゃあね」

「はい。お疲れ様でした」

「そうそう、結婚するときは知らせてね」

「分かりました。必ず」

二人は笑顔で去っていった。

「とは言ったものの…またふりだしか…。進んでは退いて進んでは退いて…そんな歌あったよな昔…」

家に帰ったたけしは少し考えていたが、やがて眠りについた。

一ヶ月ほどが過ぎた。

たけしが家で雑誌を読んでいると、電話がかかってきた。

「もしもし」

「あ、たけし？村上だけど」

「おお、村上、どうした？っていうか、そっぴやお前に聞きたいことがあったんだよ」

「もしかして、相沢のことか？」

「そうだよ。まいったぜ、まったく…」

「どうしたんだ？お前らつきあってるのか？」

「んなわけねえだろ…勝手に人の携帯番号教えやがって…」

「どうした？何があった？」

たけしは村上に一部始終を話した。

「へえ…マルチか…」

「そうだよ、ったく…」

「けどマルチなんて、今さら古いよな」

「ああ、そうだけどな」

「でも会えたんだろ？相沢さんと」

「ああ」

「きれいになつてたろ？」

「まあ、それはな」

「じゃあよかつたじゃん」

「…、お前はマルチに誘われなかったのか？」

「ああ。多分、昔まじめそうだったやつだけを誘ってんじゃないのかな？」

「お前はチャラ男だったからな」

「うるさいよ。そんなことよりさ、聞いてくれよ」

「何だ？」

「実はさ、俺、来月結婚するんだよ」

「ええ!？」

たけしは驚愕した。村上とは3ヶ月ほど会っていなかったが、この3ヶ月に何があったのだろうか？

「ど、どういうことだよ？お前、彼女いなかったよな？」

「ああ。二ヶ月ほど前にな、お見合いしたんだよ」

「お、お見合い？」

「ああ。おふくろがうるさいから、会うだけあってみたんだよ」

「ま、また古風だな…お見合いなんて」

「そしたらさ、これがきれいな人で、性格もいいし、向こうも俺のこと気に入ってくれたらしくて、とんとん拍子ってわけさ」

「そ、そうか…。ちなみにいくつの人なんだ？」

「33だったかな。けどほんとに美人なんだぜ。今度、写真見せてやるよ」

「そうか…よかったな」

「また式の日取りが決まったら、手紙送るよ」

「…いや、いいよ」

「え？なんで？」

「俺はフリーターだし、お前にとっても体裁わるいだろう？だからいいよ」

「またまた、そんなそんなこと気にしてないよ」

「いや、俺が気にするんだよ。だからいいよ。そのうち新居にでもお祝いもって行くよ」

「そうか…。まあ、それならしかたないな」

「おめでとう。よかったな」

「ありがとう。じゃあ今度の休みにでもラーメン食いに行こうぜ」
「分かった。お前のおごりでな」

「ふふふ、いいよ別に。大盛りでもなんでも好きなだけ食べよ」

村上は上機嫌だった。

「じゃあな。また今度」

「ああ。またな」

電話は切れた。

「ふっ」

ため息をつくたけし。

「みんないいなあ…。幸せそうで…」

たけしは見ていた雑誌に目を向けた。たまたま芸能人の離婚の話題のページが開いていた。

「幸せじゃないやつも…いるようだな…」

たけしは雑誌を閉じた。

「さてと、ビールでも飲むか」

たけしは少しは前向きな性格になっていた。あるいは無理やりかもしれないが、それでも前向きになるのはいいことだ。

人生はまだまだ長い。通過点でいいことがあるのが、悪いことあるのが、止まれないのだ。

そして休日。

今日は夜、村上とラーメンを食べに行く予定だ。

昼間、たけしは暇だったので、ある古本屋に来ていた。すると駐車場で車のタイヤを見て、困っている感じの女性がいた。

「……」
よく見ると、なかなかかわいい。たけしは思い切って近づいてみた。

その4へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8185k/>

恋愛しよう その3

2010年10月8日13時43分発行